

## ヨセフ物語の中にあかしされている「世の終わり」の啓示

【聖書箇所】詩篇 81 篇 1 節～5 節、創世記 39～44 章

### ペレーシート

●これから取り上げるテーマは「ヨセフ物語」の中にあかしされている「世の終わり」の啓示についてです。賛美の指導者であったアサフがこの啓示について詩篇 81 篇に記しています。このテーマについて本格的にふれる前に、かなりの予備的な知識が必要です。たとえば、詩篇 81 篇 3 節の「われらの祭りの日の、新月と満月に、角笛を吹き鳴らせ。」というフレーズだけを見て、これが何の祭りが分かる人はかなりの旧約聖書通です。この短いフレーズを理解するには、主の祭りについての聖書的知識、太陰暦の知識、そして「角笛」についての(それが吹き鳴らされる目的についての)知識が必要です。

●詩篇 81 篇の作者であるアサフは、ダビデ時代の賛美リーダーの一人です。当時の賛美リーダーは、単に神への賛美を導く音楽的な指導者だけでなく、預言的な歌を歌える霊的な指導者でもありました。詩篇 81 篇ではアサフが神の民に呼びかけ、そして預言しているのです。

【新改訳改訂第 3 版】 指揮者のために。ギテトの調べに合わせて。アサフによる

81:1 われらの力であられる神に喜び歌え。ヤコブの神に喜び叫べ。

81:2 声高らかにほめ歌を歌え。タンバリンを打ち鳴らせ。六弦の琴に合わせて、良い音の立琴をかき鳴らせ。

81:3 われらの祭りの日の、新月と満月に、角笛を吹き鳴らせ。

81:4 それは、イスラエルのためのおきて、ヤコブの神の定めである。

81:5 神が、エジプトの地に出て行かれたとき、ヨセフの中に、それをあかしとして授けられた。

私は、まだ知らなかったことばを聞いた。

### 1. 詩篇 81 篇の「角笛」、および「新月」と「満月」が意味していること

#### (1) 角笛

●角笛「ショーファール」(שופר)は雄羊の角で作られたイスラエルのラッパの一種です。旧約聖書には「ラッパ」と訳される「ハツオーツエラー」(חצוצרת)という銀でできた筒状の管があります(民数記 10:2)。これは荒野においてイスラエルの民を招集したり、行進したりする合図の音を出すためのものでした。しかし、やがてカナンの地に定住する時



代になると、「ラッパ」はおもに神殿で神を礼拝する楽器として用いられるようになりました。角笛は礼拝の賛美の中でも用いられましたが、祭司でなければ吹くことはできませんでした。角笛は人々を招集するだけでなく、戦いの武器として用いられ、王の就任の時や主の例祭、そしてある特別な合図のしるしとして吹き鳴らされたりしました。ここ詩篇 81 篇では、ある祭りの日のための合図として吹き鳴らすことが命じられています。

●新約聖書では、「ショーファール」と「ハツオーツェラー」の区別なく、主の日、すなわち、終わりの日に主が訪れる合図の「ラッパ」として、ギリシャ語の「サルピックス」(σαλπιγξ)が使われています。I コリント 15 章 52 節、I テサロニケ 4 章 16 節を参照。キリストが再臨される前には、必ず、神のラッパが鳴り響くのです。もちろん霊的な響きとしてですが、そのラッパの響きはすでに、吹き鳴らされていると信じます。

## (2) 主の例祭

●詩篇 81 篇で吹き鳴らすように命じている祭りとは、「仮庵の祭り」のことです。なぜなら、「新月」と「満月」に吹き鳴らされるのは、この「仮庵の祭り」の時だけだからです。ここでの「新月」と「満月」とは第七の月の第 1 日目と 15 日目のことです。最初の角笛は一年の中で最も大なる祭りの日が近づいたことの知らせであり、15 日目は「仮庵の祭り」の始まりを告げる角笛です。1 節に「われらの力であられる神に喜び歌え。ヤコブの神に喜び叫べ。」とあるように、仮庵の祭りの特徴は〈喜び〉です。主の再臨の日は「仮庵の祭り」の時です。

●仮庵の祭りの意義は、過去の神の恵みを回顧し、神の約束の成就を待ち望むことです。民を荒野から約束の地へ導いた神が、再び、さまよえる民を主ご自身のもとへ導き、約束したすべてのものを与えようとしておられることを期待すると同時に、神の約束に耳を傾け、新しい心をもって神に聞き従うことなのです。

●旧約における「主の祭り」の制定は非常に重要です。そこには神の救いについての啓示があり、神のご計画についてのタイムテーブルが啓示されているからです。主にある者たちは、この「主の祭り」について十分に学ぶ必要があります。

●ちなみに、A.D.200 年ごろ、ローマ・カソリック教会では「新約にある信者は安息日を含め、主の例祭を祝わないように、祝う者は信者間の交わりから除名する」との通告が出されました。このことによって、キリスト教会は元来であるヘブル的・ユダヤ的ルーツから切り離されてしまったのです。つまり、「主の例祭」に込められた神の啓示を悟ることが出来なくなってしまったのです。それゆえ、私たちはヘブル的・ユダヤ的視点から聖書を学び直す必要に迫られているのです。

「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある」(伝道者の書 3:1)とあるように、今や世界中の所々において、仮庵の祭り(キリストの再臨、終わりの時)を知らせる「新月」の角笛が吹き鳴らされています。

●月に照射される太陽の光の量は自然界や人間の営みにも大きな影響を与えています。太陽と月の関係は、霊的な世界においても深いつながりがあります。神の御子イエスは常に御父(太陽)の光を受けておられましたが、イエスが十字架につけられた十二時から三時までは全地が暗くなりました。その暗闇の中で、御子イエスは「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と叫びました。十二時から三時まで実際に全地が暗くなったというのはきわめて象徴的です。なぜなら御父がその御顔を御子から背けられたからです。しかし、

死んでから三日目にイエスは復活します。月も人の目に見える「新月」として現われるまでの二日間は見えません。このように、天地万象の中にも神の救いの啓示が隠されているのです。

●「新月」は新たな始まりを意味します。そして月の輝きは次第に大きくなり、やがて 15 日後に「満月」になります。「満月」になってから角笛が吹き鳴らされて「仮庵の祭り」が始まるのです。そしてアサフが預言したように、やがて主の勝利の歌声が聞かれるようになるのです。神の救いにおいて「新月」はキリストの十字架の死と復活を意味し、「満月」はキリストの再臨を表わしています。いずれの時にも神の角笛、神のラッパが鳴り響くのです。ちなみに、雄羊の角(ショーファール)を吹いて始まる解放の年のことを「ヨベル」(יובל)とも言います。

●「海」は霊的には神の敵であるサタンの力の象徴です。キリストの再臨を象徴する「満月」に近づけば近づくほど、海は荒れ、波が激しくなり、その力は日増しに強くなっていきます。黙示録 13 章には「海」から一匹の獣が上って来て、三年半地上を支配すると記されています。それゆえ「諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。」(ルカ 21:25~26)。

●しかし同時に、黙示録 12 章 14 節には「大わしの翼を二つ与えられた女」の話があります。その女(イスラエルの残りの者、教会を意味します)は、自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで養われるのです。これは今まで隠されていたみことばの真理がより豊かに啓示されることを意味しています。「月」が太陽の光を受け、その量が増して「満月」に近づくように、キリストの再臨前には「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識(啓示の光)」がますますその輝きを放つようになるのです(Ⅱコリント 4:6)。

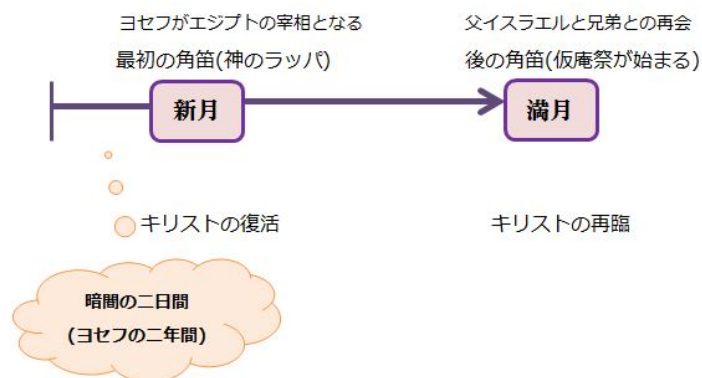
●そのことを予告するのが、アサフの「私は、まだ知らなかったことばを聞いた」(詩篇 81 篇 5 節後半)という言葉です。その「ことば」とは私たちが普段、常識的に考えている方向とは全く逆に思える神のメッセージです。ヘブル的・ユダヤ的視点から聖書を読み直すなら、日を増すごとに、神のみことばが新しく開かれ、その意味することが深められ、迫ってくるのです。

### (3) 「まだ知らなかったことば」

●詩篇 81 篇 5 節は、3 節の「われらの祭りの日の、新月と満月に、角笛を吹き鳴らせ」という預言的なことばと関連しています。詩篇には預言書と同様に、作者の意図を越えて預言的な内容、特に終末的内容が語られている場合があります。「神が、エジプトの地に出て行かれたとき」とは、神が獣の支配する地に対決するために出て来られたことを意味し、それは終末(世の終わり)の「キリストの再臨」のときを預言しています。すでに、神は「ヨセフの中に、それをあかしとして授けられ」ていました。「それ」とは、キリストの再臨を意味する「満月」のことです。

●**ところで、神はどのようにヨセフの中にそれをあかしとして置かれたのでしょうか。ここがこの詩篇の最も重要な点です。**霊的指導者であった作者のアサフは、ヨセフという人物とその生涯についてすでに知っていたはずですが、ところが彼はそのヨセフの生涯の中に、彼が聞いたことのないことばをはじめて聞いたのです。それは世の終わりについての啓示でした。特に、詩篇 81 篇 7 節以降の鍵語は「ためす」(7 節)と「かたくなな心」(12 節)です。その内容は謎めいていますが、ある視点から見ると筋が通る事柄なのです。そのことがアサフの言う「まだ知らなかったことば」です。

- ちなみに、ユダヤ教ではモーセ五書を1年周期で毎週読み続けます。その週ごとの朗読部分のことを「パラシャー」(あるいは「トラー・ポーション」)と言います。それぞれのパラシャーには呼び名がつけられています。創世記は12のパラシャーに分けられていますが、創世記41章はその10番目のパラシャーが始まる箇所です。そしてそのパラシャーのタイトルは「ミッケーツ」(מִקֵּצַ)です。
- 創世記41章は「それから二年の後、パロは夢を見た」(1節)で始まります。ここでの「・・・の後」と訳されている語が「ミッケーツ」(מִקֵּצַ)です。「ミッケーツ」は前置詞の「ミ」(מִ)と名詞の「ケーツ」(קֵצַ)が結びついた語です。「ケーツ」は時間的には「終わり」を意味し、空間的には「果て」を意味します。他に「終末、最後、最期」をも意味します。
- パロは二つの夢を見たのですが、心が不安になりエジプト中の呪法師とすべての知恵ある者たちを呼び寄せて、彼らに自分の見た夢を話しました。ところがその夢を解き明かす者がだれひとりとしていませんでした。自分の夢を解き明かす者がいないことにはがっかりしているパロを見て、献酌官長が2年前に自分の夢を解き明かしてくれた青年のことを思い出したのです。この青年とはヨセフのことです。このヨセフがパロの夢を解き明かしたことによって、ここからヨセフ物語が急展開していきます。そしてヨセフはエジプトの宰相として抜擢されることとなります。こうした流れの転換部に「ミッケーツ」という言葉があるのです。
- 「二年の終わり」とは「三年目のはじまり」に限りなく近づいていることを意味しています。ユダヤ的視点から見るなら、この時に新月の「角笛」が吹き鳴らされるのです。ヨセフの物語はまさに「世の終わり」のことを啓示しているのです。



## 2. 神がヨセフの生涯においてあかしている「世の終わり」の啓示

### (1)創世記 37 章 「そでつきの長服を着せられたヨセフ」

- 「イスラエルは、彼の息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。それはヨセフが彼の年寄り子であったからである。それで彼はヨセフに、そでつきの長服(綾織りの着物)を作ってやっていた。彼の兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、彼と穏やかに話すことができなかった。」(創世記 37:3~4)
- ここで、「そでつきの長服」とは長子の着る服のことです。つまり、父ヤコブはヨセフを他の兄弟にまさって愛

しているあかしとして、長子が着る服を作って着せていたのです。このことでヨセフは他の兄弟たちから憎まれました。

●ヨセフが「長子」として扱われたのは神のみこころです。歴代誌第一 5 章 1～2 節にはこうあります。「イスラエルの長子ルベンの子孫—彼は長子であったが、父の寢床を汚したことにより、その長子の権利はイスラエルの子ヨセフの子に与えられた。ユダは彼の兄弟たちにまさる者となり、君たる者も彼から出るのであるが、長子の権利はヨセフに帰したからである—」と。ヨセフは霊的な意味でメシヤを予表する人物とされたのです。それゆえ、終わりの時にヨセフがあかしとなるのです。

●御子イエスも御父から愛されました。御子イエスが公生涯に入られる前に、人類と一つになるためのバプテスマを受けられますが、そのとき、「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」という天から声がありました。御子イエスが御父からことのほか愛されていることで、当時のユダヤ人は、ヨセフの兄弟たちがそうであったように、イエスを憎んだのです。

●ヨセフがイエスを予表している点他にもあります。ヨセフは自分の見た夢を兄弟たちに語りました。その夢とは、兄弟たちの束がヨセフの束におじぎをしているというものでした。それはヨセフが兄弟たちを支配する王となることを預言したものでした。そのことでヨセフが憎まれたように、イエスも自分がユダヤ人の王となると言ったために憎まれました。またヨセフは兄弟に憎まれたことで、異邦人の地であるエジプトに売り飛ばされました。御子イエスの場合も、当時の王ヘロデが尋ねてきた東方の博士たちの「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか」ということばを聞いて、恐れ、イエスを殺そうとしたために、幼子イエスを連れて両親はエジプトに逃れています。そして御子イエスはユダヤの中心であるエルサレムではなく、異邦人の地ナザレに行き、そこで育ち、やがて同じく異邦人の地ガリラヤから宣教を始めています。

## (2) 創世記 39 章 「エジプトに売られたヨセフ」

●ヨセフはパロの廷臣で侍従長のポティファルの奴隷となります。ところがヨセフは主人の妻の誘惑を受け、それを拒んだために、濡れ衣を着せられ、監獄に監禁されてしまいます。それは主人の妻のところに自分の上着を残して逃げたからです。さらに、「ヘブル人の奴隷」ということばも使われています。つまり、残された上着がヘブル人の着るものであったことから、ヨセフは一切弁解することを許されず、監獄に入れられたのでした。

●このことは、初代教会が宣教を拡大しローマ帝国の中に入って行ったときに、その指導者がユダヤ人であったために、異邦人であるローマ人は彼らのユダヤの伝統的な風采を嫌って迫害したことを予表しています。

## (3) 創世記 41 章 「エジプトの王から宰相とされたヨセフ」

●41 章でパロの夢を解き明かす者がいるということで、ヨセフがパロのもとに呼び寄せられます。そのとき、「彼はひげをそり、着物を着替えてから、パロの前に出た。」(14 節)とあります。これは、ヨセフがヘブル人だと分かる風采を捨てて、エジプト人のようにして出たということの意味します。これは後の時代、つまり、福音がローマに広がって行った時代に、ユダヤ的・ヘブル的な伝統が断ち切られるという事実を暗示しているようにも見えます。

●ヨセフはパロの夢を解き明かすことによって、一瞬にしてエジプトの宰相に任じられました(41:39～43)。パロは自分の指輪を手からはずして、それをヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首には金の首飾りを

掛け、自分の第二の車に乗せました。そしてヨセフにエジプト全土を支配させたのです。またヨセフはヘブル人としての名前さえも変えられて「ツァフェナテ・パネアハ」(「全地を救う者」の意)という名前を与えられ、エジプトの太陽神に仕える祭司の娘を妻として与えられます(41:42~45)。このことはヨセフが太陽神を拝むエジプトにおいて異邦人化されることを意味します。

- このことも、やがてキリスト教会が異邦人によって完全に支配されてしまうことを暗示しています。キリスト教会は太陽神を拝んでいたコンスタンティヌス帝の支配のもとでローマの国教として護教されます。この皇帝は大のユダヤ人嫌いと言われ、彼によってキリスト教会はユダヤ的・ヘブル的なルーツが断ち切られてしまい、教会は完全に異邦人化してしまいました。ローマ・カソリック教会はまさにその皇帝の政治的護教の中でユダヤ人を教会から完全に排斥するようになりました。まさにエジプトの王パロがヘブル人であるヨセフを完全にエジプト人にしたと同じことが起こったのです。そのために、本来ユダヤ人であるはずのイエスが、西洋人の顔をしたイエスに変わってしまいました。イエス・キリストはまさにユダヤ的・ヘブル的な世界で神が約束されたことの実現者であるにもかかわらず、異邦人化されたイエスのイメージとなってしまいました。ユダヤ的ルーツを根絶させられたその弊害が教会にとってどんなに大きな痛手であったかを、多くのキリスト者たちは気づかずにいます。

- ヨセフとエジプトの妻との間に二人の子どもが生まれます。ひとり「マナセ」、もうひとり「エフライム」です。一番目の「マナセ」の名前は「忘れる」という意味。これまでの辛い苦しい経験を忘れるという意味合いもありますが、異邦人化されたヨセフがイスラエルのことを忘れてしまうという意味合いもあります。しかし二番目の「エフライム」の名前は「栄える」という意味で、国々の中において栄えるという意味です。この二人の息子の名前は神の救いのご計画においてきわめて重要な啓示です。「マナセ」が象徴していることは、異邦人教会が自分たちのルーツを忘れてしまうということであり、「エフライム」が象徴していることは、そのルーツが回復されることで異邦人とヘブル人(ユダヤ人)が共に共同相続人として一つになることを啓示しています。

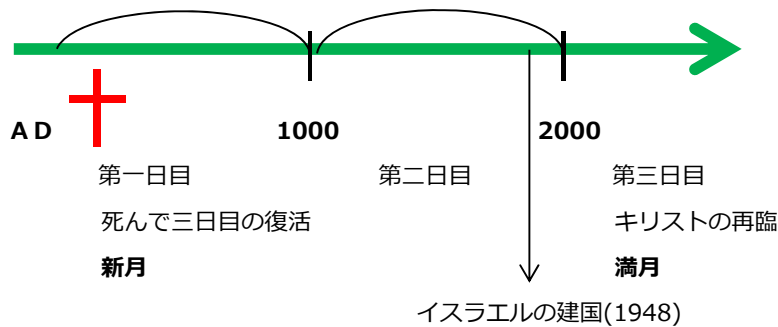
#### (4) 創世記 42 章 「自分の正体をすぐに明らかにしないヨセフ」

- 再度、飢饉に襲われたイスラエルとその子どもたちは食を得るためにエジプトへ行こうと決心します。そしてエジプトに行ったとき、ヨセフは自分の兄弟たちだとすぐに分かりましたが(42:7)、兄弟たちはヨセフの顔を見ても自分の弟だとは分かりませんでした(42:8)。なぜでしょう。それはヨセフの風采が異邦人になっていたからです。

- 同様に、キリスト教会の歴史において異邦人化されたイエスが作り上げられて来たため、今のユダヤ人たちはイエスが自分たちのメシヤであることが分からずにいるのです。しかし世の終わりの時代には、異邦人化されたイエスが実は自分たちのメシヤだと分かるユダヤ人が現われてくるのです。それがメシアニック・ジューの人たちです。メシアニック・ジューの存在によって、キリスト教会はイスラエルの回復に対して目が開かれつつあるのです。それまでキリスト教会はイスラエルの回復についてほとんど関心を示しませんでした。むしろユダヤ人を嫌っていました。彼らはクリスチャンにとって兄弟ではなかったのです。しかし近年、霊の目が開かれてユダヤ人を自分たちの兄弟だと悟るようになって来ています。イスラエルの回復についての多くの啓示が現われて来ています。それは 21 世紀に入ってから、つまり神の救いの計画の三日目に入ったからです。

- ヨセフはいつ自分の正体を明らかにするのでしょうか。それは、41 章 18 節に「ヨセフは三日目に彼に言っ

た。・・・」とあるように「三日目」になってからです。「三日目」というのは象徴的です。イエスが死んでよみがえったのも「三日目」ですが、ここではむしろペテロの言う意味での「三日目」です。ペテロは「キリストの来臨の約束はどこにあるのか」と言う者に対して次のように述べています。「愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」(Ⅱペテロ 3:8)



●現代は「三日目」に入り、いよいよ「満月」に近づいているのです。ですから、イエスがメシヤだと分かるユダヤ人が起こされはじめて来ているのです。

●しかしヨセフは自分の正体をすぐには明かさず、自分の兄弟たちを試します。具体的には、一つは、ヨセフの実の弟(同じ母ラケルから生まれたベニヤミンのこと)と一緒に来ていなかったことから、そのベニヤミンを連れてくること。もう一つは、兄弟たちが本当に悔い改めているのかどうかということです。

「彼らは互いに言った。『ああ、われわれは弟(ヨセフ)のことで罰を受けているのだなあ。あれがわれわれにあわれみを請うたとき、彼の心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかった。それでわれわれはこんな苦しみに会っているのだ。』」(42:21)と。

ここを見ると、ヨセフの兄弟たちはヨセフを売ったことを悔い、苦しんでいます。

●同じように、イエスを十字架につけたユダヤ人たちの中からも悔い改めが起こってきます。ベニヤミンの存在は現代のメシアニック・ジューだと言えます。ベニヤミンという名前は「右の手」という意味で、最も信頼すべき存在とも言えます。ベニヤミン族出身者の中にモルデカイ、エステル、パウロといった人々がいます。彼らはみなイスラエルの救いのために人生をささげ、イスラエルの回復のために情熱をもった人たちです。彼らは今日のメシアニック・ジューの型なのです。

●24節に「ヨセフは彼らから離れて、泣いた。」とありますが、イエスも今日、ユダヤ人たちの中から悔い改める者が起こされていることを喜び、泣いておられるのです。

#### (5) 創世記 43章 「兄弟たちを試すヨセフ」

●そのあと紆余曲折がありますが、結局、兄弟たちはベニヤミンを伴ってエジプトへ下り、ヨセフの前に立ちます(43:15)。そのときにも、ヨセフはベニヤミンを見て「弟なつかしさに胸が熱くなり、泣きたくなって、急いで奥の部屋にはいって行って、そこで泣いた。」(43:30)とあります。

● 1948年、イスラエルが独立し、建国されるまでは、全世界の中でイエスをメシヤであることを信じるユダヤ人を見つけることは困難でした。しかし今や、イエスをメシヤであることを信じるユダヤ人、つまりメシアニック・ジューの人たちが起こされてきています。現在はアメリカだけでも百万人のメシアニック・ジューがいるのです。西暦二千年までイスラエルにおいてメシアニック・ジューの共同体はわずかでした。しかし今はとても多くなっています。そのことをイエスは喜んでおられるだけでなく、ますますユダヤ人を呼び戻しておられるのです。

#### **(6) 創世記 44 章 「自分の正体を明かすヨセフ」**

● しかし、ヨセフは兄弟たちを最後の最後まで試します。

創世記 44 章では「銀の杯」のことが出てきます(44:2)。この「銀の杯」をベニヤミンの袋の中に入れるようヨセフは家の管理者に命じます。そして、わざと問いがかりをつけられるようにしました。実は、「銀の杯」とはイエス・キリストの贖いを象徴しています。ユダヤ人たちは数千年の間、過越の祭りの時に銀の杯にぶどう酒を入れて飲んでいましたが、「銀の杯のぶどう酒」がキリストの贖いを象徴するものであることを悟ったユダヤ人は多くはありませんでした。ベニヤミンだけが「銀の杯」を持っていたということは、今日、キリストの贖いを正しく理解したメシアニック・ジューを意味しています。

● ところで、ヨセフは自分の「銀の杯」がベニヤミンの袋から見つかったときに、他の兄弟たちがどうするかを試したのです。つまり、ベニヤミンだけを自分のもとに留めようとするので、他の兄弟たちがどうするかを試したのです。それが 44 章の内容です。兄弟の中のユダが自分たちの家の事情を詳しく話し、ベニヤミンと一緒に帰らなかったとしたら、父(イスラエル)は死んでしまうと訴え、自分が身代わりとなることを申し出ます。これを聞いたヨセフが彼らの愛を知ったとき、自分を制することができなくなり、声を上げて泣き、はじめて自分がヨセフであることを兄弟たちに明かしました。

● イエスはエルサレムを見て泣かれました。ルカ 19 章 41～44 節参照。イエスは、この都エルサレムが完全に崩壊する日がやってくるにもかかわらず、そのことが「おまえの目から隠されている。・・・それは神の訪れの時を知らなかったからだ」ということで泣き叫びました。しかし再び、ユダヤ人が「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」という悔い改めの祈りをささげる時が来るのです(ルカ 13:35)。ユダヤ人たちのうちに真に悔い改めがなされるときに、はじめて主はご自身を明らかにされるために戻って来られます。それは終わりの時のきわめて美しい光景です。それゆえ主は、今、イスラエルが回復されるようにと呼びかけておられるのです。

#### **ゼカリヤ書 12 章 10 節**

「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願(悔い改め)の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」

#### **最後に**

#### **ローマ人への手紙 11 章 17, 18 節**



17 もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、18 あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。

●栽培されたオリーブの木はイスラエル(ユダヤ人)を意味し、野生種のオリーブの木は異邦人を意味しています。その二つが接ぎ木されるときその部分は亜麻布で巻かれますが、正確に三日が経つと、その二つはくっついてきます。神の救いの計画において今は、その「三日目」なのです。そして、その接ぎ木された部分が完成する時なのです。

### **ホセア書 6章 1~3 節**

- 1 「さあ、【主】に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、また、包んでくださるからだ。
- 2 主は二日後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。
- 3 私たちは、知ろう。【主】を知ることが切に追い求めよう。主は暁の光のように、確かに現われ、大雨のように、私たちのところに来、後の雨のように、地を潤される。」